

平成26年度教育事業

伊予の伝承文化を学び伝えるリーダー村

参加した大学生は、昔の人の生活に興味を持つ小学生たちが参加した「子どもむかし生活体験村」を運営することを通じて、自分たちが学んだ愛媛の伝承文化を伝えるとともに、リーダーの資質や子どもとのかかわり方に関して深く学び、地域に根ざして活動しようとするリーダーとして成長しました。

1. 事業実施までの経緯

本事業は当所でのこれまでの体験活動が自然体験活動中心であったことや、日本では自然と生活文化が一体化していると思われること、日本の伝承文化を理解し、それを継承していこうとする意識が希薄化していること等から、自然と文化の融合体験、及びそれをとおして地域に根ざして活動するリーダーを養成することを目的として、平成19年度より国立大学法人愛媛大学との共催事業として実施している。また、平成25年度から法人ボランティア養成事業として実施している。

8年目となる今年度も、参加する大学生の意識を高めるために愛媛大学と連携して、前年度末より打合せを重ね事業内容を早期から決定し、大学への広報に力を注いだ。また、平成24・25年度に引き続き、実施2週間前に当所の担当者、愛媛大学の担当者を講師に、大学生対象の事前説明会を実施した。

小学生の参加対象は、昨年度に引き続き、4～6年生とした。小学生の広報の範囲は、愛媛県中予・南予地区全域とし、幅広い地域からの参加者を募った。これは、子どもたちが初めて出会う友人と、普段あまりできない異年齢集団での生活、遊びを経験してもらいたいと考えたためである。参加者の中には、ホームページから当事業を知り、名古屋市から応募した小学生もいた。

内容については、過去「わら」「伊予竹」「泉貨紙」等の素材をテーマに事業を展開してきたが、今年度については、伝承文化としての「伊予竹」「古民家」を素材に、昨年度の課題を踏まえ、「リーダーの養成」を重点テーマとして事業を展開した。リーダーの養成について、具体的には個々のプログラムの「ねらい」を焦点化し、それに照らした「ふりかえり」を充実させることに留意した。また、大学生も小学生も、学んだことを十分にふりかえることができるよう、昨年度より一泊延長し、5泊6日の事業とした。

その際、製作方法や安全上の留意点、舞台となる土居家に関する知識等を、講師や惣川地区の方々から大学生が学び、小学生に伝えることとした。

以上の点を考慮しつつ、関係機関と連携しながら、今年度の事業を進めた。

2. ねらい

地域を大切にし、地域に根ざして活動するリーダーが求められている中で、愛媛の伝承文化を学び、先人の知恵と自然体験の融合した体験活動をすることで、地域を大切にしようとする心を育むとともに、「子どもむかし生活体験村」を自ら計画し、運営することで、地域に根ざして活動しようとするリーダーを養成する。

3. 主 催 独立行政法人国立青少年教育振興機構 国立大洲青少年交流の家
国立大学法人 愛媛大学

4. 後 援 [後援] 愛媛県教育委員会 西予市教育委員会 大洲市教育委員会
NHK松山放送局 あいテレビ 愛媛新聞社
[協力] 西予市野村町惣川「土居家」

5. 期 日 平成26年8月18日(月)～23日(土)
 (子どもむかし生活体験村は8月20日(水)～23日(土))

6. 場 所 国立大洲青少年交流の家(18日(月)、22日(金)～23日(土))
 西予市野村町惣川「土居家」(19日(火)～22日(金))

7. 参加人数 大学生14名(募集人数15名)
 (子どもむかし生活体験村 小学校4～6年生20名)(募集人数20名)

8. 講 師

岩本 康孝 氏(大洲市立喜多小学校教諭・初等教育研究会会員)
 大本 敬久 氏(愛媛県歴史文化博物館専門学芸員)
 犬伏 武彦 氏(元松山東雲短期大学特任教授)
 西予市野村町惣川地区の方々
 山崎 哲司 氏(愛媛大学教育学部教授)
 日野 克博 氏(愛媛大学教育学部准教授)
 国立大洲青少年交流の家担当職員

9. 日 程

8/18 (月)	9:30	10:00	10:30	12:00	13:00	15:30	16:30	17:30	19:30	20:30	21:00	22:00
		受付	開講式	アイス ブレイク	昼食	(演習・実習) 竹の遊び道具・うちわづくり 実習と安全管理	(講義) 現代の 教育	(講義) リーダー について	夕食 入浴	(講義) 子どもとの かかわり方	(演習) 役割分担	情報 交換 会
8/19 (火)	9:00	10:30	12:30	13:30	17:30	19:30	22:00					
		バス移動 土居家へ	(講義・演習) 土居家のつくりと 歴史的意義について	昼 食	(演習・実習) 現地下見と安全管理、リーダーズ プログラムの計画(終了後に法人ボラン ティア登録)	夕食 入浴	(演習) プログラム計画・運営準備	就寝				
8/20 (水)	8:30	10:30	12:00	13:00	14:30	17:30	19:30	21:00	22:00			
		子どもむかし 生活体験村 運営準備	開 村 式	仲間 づくり ゲーム	昼食	(講義・演習) 愛媛の民俗文化 について	(活動Ⅰ) 竹の遊び道具づくり	夕食 入浴	(活動Ⅱ) 班活動 目標づくり	打合せ 企画会	就寝	
8/21 (木)	9:00	12:00	13:00	18:00	20:00	21:00	22:00					
		(活動Ⅲ) うちわづくり 竹食器・竹箸づくり	昼食	(活動Ⅳ) リーダーズプログラム①	夕食 入浴	(活動Ⅴ) リーダーズ プログラム②	打合せ 企画会	就寝				
8/22 (金)	9:00	12:00	13:00	15:00	15:15	17:00	17:30	19:30	20:30	22:00		
		(活動Ⅵ) うどんづくり	昼食	清掃 片付け	土居家 退家式	バス移動 交流の家へ	片付け 部屋入り	夕食 入浴	思い出発表 準備	ふりかえり	就寝	
8/23 (土)	9:00	10:00	11:00	12:00								
		思い出 発表準備	閉村式 思い出発表	ふりかえり 閉講式	大学生解散							

10. 活動内容

〈開講前【8月4日（月）】〉愛媛大学

「事前説明会」国立大学法人愛媛大学 山崎哲司氏 日野克博氏

国立大洲青少年交流の家職員（16：30～18：00）

本事業に応募した大学生を対象とした事前説明会を愛媛大学にて開催した。事業に応募した14名の学生は愛媛大学8名（教育学部2名・法文学部1名・農学部1名・医学部看護学科4名）と、松山東雲女子大学4名、香川大学1名、大分大学1名であった。

説明会では、はじめに前年度の参加者が学生の立場から感想も含め、事業の様子を紹介してくれた。続いて交流の家職員が、本事業の概要やねらい、青少年教育施設における活動内容について紹介した。また、参加者には法人ボランティア登録制度についても説明を行った。本事業では、事業前半の講義・演習等が法人ボランティア登録に必要な共通カリキュラムも兼ねていることから、事前説明会を用いて説明することとした。

最後に、共催の愛媛大学から講師を務めていただく山崎哲司氏が参加者に対し、激励と望ましい参加態度についての講話を行った。

〈第1日【8月18日（月）】〉国立大洲青少年交流の家

「アイスブレイク」 国立大洲青少年交流の家職員（10：30～12：00）

参加した大学生14名の緊張をほぐすことを目的として、アイスブレイクを行った。様々な活動を行う中で、自然に笑いが生まれ、参加者同士の交流が深まった。また、20日（水）から始まる「子どもむかし生活体験村」で、小学生に「仲間づくりゲーム」を実施できるようにするためのスキルを身に付けることもできた。



「竹の食器・竹の遊び道具、うちわづくり指導法、安全管理講習」

国立大洲青少年交流の家職員（13：00～15：30）

翌日以降20日の竹食器・水鉄砲づくり等の活動において刃物を用いることから、刃物を使った体験活動を実施する際の安全管理や、野外における体験活動における危険予測やリスクマネジメントについて学んだ。リスクの発見・把握、評価・分析、対処・処理、事前の準備や心構え等について考えさせた。また、当日は、大学生が小学生に竹食器や水鉄砲等の遊び道具づくりを指導することから、自分たちで実際に竹の遊び道具や竹食器を作ることで、その手法や手順、安全上の要点などを確認した。大学生は熱心に活動に取り組み、現地で子どもたちが安全に活動できるための要点等を実践的に考えることができ、その手応えを感じていた。



「現代の教育」 国立大学法人愛媛大学 山崎哲司氏（15：30～16：30）

「現代の教育～リーダー村と大学教育～」について、愛媛大学教育学部教授の山崎氏による講義が行われた。現在、愛媛大学では大学教育の手法として、アクティブ・ラーニング（能動的学習）を取り入れた学びが重視されていることや、専門教育に加え、社会への適応能力の高い学生を養成するためにジェネリック・スキル（汎用的能力）を身に付けさせる学びを展開していることなどが紹介された。今回の講義の中でも、「恐竜」をテーマにグループワークを実施し、アクティブ・ラーニングに



ついて、実践を伴う学びを展開した。また、ワークショップを通して、コミュニケーション能力や協働する力の必要性、知識や経験をこれからの活動につなげていくことの重要性等が説かれた。今回の事業で大学生に期待する内容として、事業前半部分の活動で学習した知識と経験を、後半の「子どもむかし生活体験村」でリーダーとして活用することができること、お互いの役割を認識し、協働しながら活動を有意義なものにしていくことなどが挙げられた。また、実践的な学習とするために、目標設定、計画、事後の「ふりかえり」が重要であることも述べられ、大学生は、これから始まる事業の目的を明確にすることができた。

「リーダーについて」 国立大学法人愛媛大学 日野克博氏（16：30～17：30）

「リーダーについて」と題して、愛媛大学の日野氏による講義が行われた。最初に、参加者がめざす「リーダー像」を明確化させるためにイメージマップを作成させ、その後、ペア学習によって「わたしの目指すリーダー像」を確認させる作業を行った。また、本事業のねらいは、子どもたちの活動が成功するようにリーダーとして導くことができること、と定義づけられた。その後、小学生を迎えるにあたって、「親の立場」「社会人としての立場」「子どもに近い立場」という3つの立場を考えて活動するよう、注意が促された。また、「言葉による指導」として、著名な指導者による名言が数例紹介された。最後に、今回の活動を通して、「『リーダーとは』と問われたときに、自分なりに明確な回答が示せるようになること」「オリジナルの名言を生み出すこと」という課題が大学生に提示され、講義は終了した。



「子どもとのかかわり方について」 大洲市立喜多小学校 岩本康孝氏（19：30～20：30）

大学生が小学生を迎える前に、子どもとのかかわり方について学び、その不安を解消することがこのプログラムの目的である。喜多小学校の岩本氏から、子どものほめ方や叱り方、学級集団をまとめるためのルール作りの方法など、自身の経験に基づいた実践的な内容の講義であった。大学生にとっては、実際の教育現場で活躍している先生の話聞く貴重な機会となった。



〈第2日【8月19日（火）】〉西予市野村町惣川『土居家』

「土居家のつくりと歴史的意義について」 犬伏武彦氏（10：30～12：30）

西日本最大級の茅葺き古民家である土居家の復興に尽力された犬伏武彦氏を招き、土居家の建築構造上の特徴と歴史的背景、そしてこの土居家を保存していくことの意義について話された。大学生は、土居家の歴史的な背景について理解するとともに、希少な文化財である土居家で宿泊することが貴重な経験であることを再認識し、土居家を自らも大切に使うとともに、子どもたちにも大切に使うことを指導していくことが重要であることを深く認識することができた。



「現地下見と安全管理」（13：30～17：30）

21日のリーダーズプログラム①で『むかし遊び』等をする予定の三島神社までの山道を実際に歩き、危険箇所の確認を行った。また、『川遊び』をする予定の三島神社水辺公園の河原に行き、

危険箇所の確認と、活動範囲および立入禁止箇所の確定、スローバック等による救助方法、応急手当の方法や緊急連絡の手順について学んだ。これらの活動を通じて、子どもたちの命を守る安全管理の重要性について改めて認識し、真剣に学ぶことができた。

「リーダーズプログラム立案」(19:30~22:00)

大学生主体で実施する「リーダーズプログラム」の立案を行った。大学生が担当するプログラムについて、各担当でその内容や運営方法について話し合った。話し合いの結果を全員の前で発表し、質疑応答をすることで内容の深化とプログラムの共通理解を図った。また、小学生を迎えるにあたって、楽しく、安全に、充実した生活ができるとともに、子どもたちのよき成長の場となるよう、『土居家の掟』を定め、リーダーとして、子どもたちに意識させるよう働きかけていくことを確認した。大学生は、いよいよ小学生を迎える時が近づき、今まで学んできた内容を再確認しながら、強い思いで団結して、立案、準備作業に励むことができた。



〈第3日【8月20日(水)】〉西予市野村町惣川『土居家』

「子どもむかし生活体験村」運営準備(8:30~10:30)

小学生を迎える日になり、期待と不安を胸に、大学生は小学生を迎える準備を行った。「子どもたちも期待と不安でいっぱい。私たちが笑顔で、楽しい第一印象を！」の共通認識のもと、『土居家』の清掃や小学生へのかかわり方の確認等をした。

「子どもむかし生活体験村」開始(10:30~)

「仲間づくりゲーム」(11:00~12:00)

小学生が『土居家』に到着して最初のプログラムである。初めて出会う者同士の緊張を和らげることを目的に「仲間づくりゲーム」を大学生主導で実施した。個人的なアイスブレイクから徐々に大きな集団にしていき、最後に全員で楽しむゲームをした。このプログラムを通じて、自己紹介も終え、最初は緊張していた小学生も、自然と会話が増え、お互いの距離が少しずつ縮まっていった。



「愛媛の民俗文化について」 愛媛県歴史文化博物館 大本敬久氏(13:00~14:30)

愛媛県歴史文化博物館の大本氏を招き、土居家の歴史、建築素材や工夫されている昔の知恵や技について、実際に土居家のさまざまな箇所を回ることによって説明していただいた。その際、大学生は犬伏氏から学んだことを小学生に話す姿も見られた。子どもたちは目を輝かせて、初めて見る昔の建物や、昔ながらの生活の工夫について学び、この建物を残していくことの重要性や、ここで宿泊できることの希少



性に気付くことができた。

「竹食器・竹箸づくり、竹の遊び道具作り」(14:30～17:30) 惣川地区の方々

惣川地区の方々の指導のもと、班ごとに分かれて竹を用いた食器や遊び道具の製作を行った。大学生も18日の演習で学んだ技術や、安全上の留意点を小学生に伝える形式で製作をサポートした。竹の水鉄砲、竹馬の製作については、竹を切ったり曲げたりする際に使う刃物やガスバーナーの扱い方について細心の注意を払うよう心掛けようとする大学生の姿が見られた。製作途上でなかなか思い通りにいかない子どももいたが、大学生や惣川地区の方々の指導で、最終的には全員が上手に作る事ができた。作り終わった子どもたちは、自らの作品を手に、思い思いに楽しく遊ぶことができた。



「班活動・目標づくり」(19:30～21:00)

小学生に秘密にしていた翌日のプログラムを、大学生が、晴天時の場合、雨天時の場合ともに発表した。その後、班ごとに集まり、これらのプログラムを安全に楽しく、充実して実施していくために、小学生が、それぞれの個人の目標、班の目標を立てて、全員の前で発表し合った。小学生は、大学生が用意してくれたプログラムをととても楽しみにし、翌日が待ちきれない様子であった。

また、小学生は一日のことを日記に書き、大学生は班のすべての子どもたちの日記に返事を書いた。



〈第4日【8月21日(木)】西予市野村町惣川『土居家』、三島神社周辺

「うちわづくり」(9:00～12:00)

大学生が「うちわ作り」の技術を小学生に伝えた。大学生は、限られたスペースの中で効率よく活動するために、絵付けやのり付け、乾燥の場所を分けることにした。この大学生のアイデアにより、小学生はスムーズに活動をすることができた。自分のオリジナルうちわを手にした小学生の嬉しそうな笑顔が印象的であった。



「リーダーズプログラム①」(13:00～18:00)

場所を三島神社に移動し、大学生が主体的に内容を考えたプログラムを実施した。土居家から三島神社までの山道は急な下り坂が多かったが、道中の危険箇所では、19日の「現地下見」で学んだことをもとに、大学生が子どもに注意を促すなどして、安全に目的地まで移動することができた。到着後は大学生の指導で、『むかしあそび』を実施した。「わっしょいゲーム」や「いろおに」、「すいか割り」などをして、楽しく遊ぶことができた。小学生の中には遊びのルールやコツを知らない者もいたが、大学生の分かりやすい説明や優しい声掛けにより、自然に集団の中に入って行くことができた。小学生にとっては、学校以外の場所で、普段あまり経験すること



ができない異年齢集団での遊びを一緒に楽しむことができたという点で、貴重な活動となった。

次に神社の近くを流れる川に移動し、「川遊び」を行った。遊ぶ前には大学生は小学生にライフジャケットの確実な着用を指導し、水難事故の防止に努めた。川遊びでは、水を掛け合う者や20日に作った水鉄砲で遊ぶ者、箱眼鏡で川の中の生物を観察する者など、それぞれが思い思いに遊びを楽しんだ。その間、大学生は小学生と一緒に遊んで楽しみながらも、19日の現地下見における打合せで割り振られたポイントに立ち、小学生を監視するなど、役割分担して安全に留意して指導することができていた。川遊び終了後は、小学生も大学生もその多くがずぶ濡れになっていたが、みんな充実した表情をしていた。



「リーダーズプログラム②」(20:00~21:00)

大学生が内容を考えた『提灯ハイク』を実施した。当日は天候にも恵まれ、頭上には満天の星空が広がっていた。そこでハイク出発前に急遽、交流の家職員によるミニ天体観測会も実施。街中の喧噪を忘れさせるほどの静寂を誇る惣川地区の星空を見上げ、小学生、大学生とも心安らかなひとときを過ごすことができた。提灯ハイクの灯火は和蝋燭を用い、むかしの人たちが夜に頼りにした様子を想像しながら、真っ暗な惣川の道を散策するプログラムである。参加者は、街灯が少なく暗い中、「提灯」の灯りを頼りに肩を寄せ合って夜道を歩いた。大学生が班の前後について歩いたりするなど、安全面にも配慮して実施できた。また、土居家に帰着すると、土居家がきれいにライトアップされており、子どもたちはその壮観な光景に見入るとともに、この2日間のことをふりかえり、部屋に戻って日記を書いた。大学生は班のすべての子どもたちの日記に返事を書いた。



〈第5日【8月22日(金)】〉

西予市野村町惣川『土居家』、野村少年自然の家、国立大洲青少年交流の家

「うどん作り」惣川地区の方々(9:00~12:00)

最終日は、惣川地区の方々の指導のもと、「うどん作り」を行った。うどん作りでは、生地踏みや製麺機を使う作業を体験した。自分たちで作ったうどんを、自分たちで作った食器で食べる小学生の顔は、達成感と成就感に満ちており、満足そうに食べている様子がうかがえた。大学生も小学生の自主性を尊重しながら、活動をうまく補助することができた。



「土居家清掃・片付け・退家式」（13：00～15：15）

大学生は3泊4日、小学生は2泊3日お世話になった土居家を全員で掃除し、搬入した物品の片付けを行った。参加者たちは、土居家で過ごした日々を思い出し、「これで最後かあ。」などと口にしながらも、丁寧に掃除、片付けに取り組んだ。犬伏氏、大本氏から学んだ古民家の歴史に思いをはせながら、畳やふすま、柱などに気をつけながら掃除を行う小学生の姿が印象的であった。

全ての掃除、片付けが終わった後、お世話になった食堂の方たちにお礼を述べ、土居家を後にした。



「思い出発表準備①」 国立大洲青少年交流の家職員（19：30～20：30）

活動場所を国立大洲青少年交流の家に移し、小学生たちはふりかえりの活動をスタートさせた。最終日の閉村式を前に、迎えに来られた保護者に対して、土居家での活動を紹介するための準備を行った。3日間の日程を5つに分け、班ごとに活動報告を分担した。大学生のサポートを受けながら、スライドに映し出す写真を選んだり、活動を紹介する台詞を考えたりした。発表の内容が決定した班から、本番の発表に向けた練習を開始した。



「ふりかえり」 国立大学法人愛媛大学 山崎哲司氏 日野克博氏（21：00～22：00）

愛媛大学の山崎氏、日野氏が、5日間の活動を通しての「ふりかえり」を実施した。18日に提示された「『リーダーとは？』と尋ねられたら、どう答えるか。」という課題に対して、大学生からは多様な回答が発言された。また、活動を通して自らの「心の支えになった言葉」「前向きにさせてくれた言葉」などを報告しあった。発言された言葉はどれも、大学生一人一人の思いが込められていた。ふりかえりの活動を通して、大学生はそれぞれにねらいを持ち、意義をとらえながら活動をやり遂げられたという充実した姿が見られた。

〈第6日【8月23日（土）】国立大洲青少年交流の家

「思い出発表準備②」（9：00～10：00）

前日の発表準備の時間では十分に練習できなかったところを中心に、各班が大学生のリードのもと、一生懸命練習する姿が見られた。準備の後半にはリハーサルを行い、お互いの発表を見つめながら、3日間を懐かしくふりかえる参加者の表情が見て取れた。



「思い出発表会」（10：00～10：30）

迎えに来られた保護者の方々を前に、思い出発表会を行った。5つの班が順番に、活動の様子を写したスライドを前に、ふりかえりの言葉を述べた。最後の班が発表を終えたところで、小学生から大学生に感謝の思いを歌と手紙にして伝えるプレゼントがあった。歌詞の最後には「たのしいお兄さん、やさしいお姉さん、楽しい日々をありがとう」という歌詞があり、その場面を迎えたときには小学生、



大学生、保護者の多くが涙を流していた。感動に包まれた中、発表会を終えることができた。

「閉村式」(10:30~11:00)

思い出発表会の後、閉村式を行った。最初に「村の掟」を参加者全員で唱和した後、村長として山下次長があいさつを行った。山下次長はあいさつの中で、子どもたちの成長にとって体験活動が重要であること、そしてこの貴重な経験を活かして欲しいと述べた。最後に参加小学生を代表して、6年生男子児童が、4日間の活動を振り返り、関わった全ての人たちへの感謝と、今後の活躍を誓うあいさつをして、子どもむかし生活体験村の全日程を終了した。



「子どもむかし生活体験村」終了

「ふりかえり」 国立大洲青少年交流の家 職員 (11:00~12:00)

大学生一人一人が、6日間の感想を順番に述べる形で事業の振り返りを行った。ともに活動した仲間への感謝を述べる者、小学生の成長を目の当たりにした驚きを口にする者、事業への参加動機から現在をふりかえり、自分自身の成長を語る者と、それぞれが自らの言葉で感想を伝えあうことができた。涙を流しながら話したり、思い出話に笑いが起きたりする場面もあり、和やかな雰囲気を保ちつつ、有意義なふりかえりができた。全学生の感想を終えて、講師の山崎氏、日野氏からそれぞれ事業のまとめがあった。ふりかえりを終えた後、引き続き閉講式を行い、本年度の事業を無事終えた。



11. 参加者の声

参加者の事後アンケートの結果

【小学生】

*満足：95.0% *やや満足：5.0% *やや不満：0.0% *不満：0.0%

- いろいろな体験ができてうれしかった。
- 夏休みに一番いい思い出ができた。
- 友だちと仲良くできることで、自分に自信を持つようになった。

【大学生】

*満足：100.0% *やや満足：0.0% *やや不満：0.0% *不満：0.0%

- たくさんの学び、感動があった。
- 参加している途中でさえも、「また参加したい」「学びたい」と思える事業でした。本当に、本当に、感謝でいっぱいです。
- 自分を見つめ直すことができ、また、他大学の人も交流ができ、考え方や価値観を共有しあえて良かった。

12. 成果と課題

【成果1】参加した大学生に成長が見られ、大学生自ら分析できたこと

今年度の事業テーマとして「リーダーの養成」を挙げた。子どもたちとの出会いの前に行った2日間の研修を通して、理論的、実践的な学習に取り組めた。参加者がお互いの存在を確認しあうことで、自らに科せられた役割を相互に認識することができた。

過年度の反省をもとに、「ふりかえり」を重視した活動にも取り組んだ。日々の活動の最後に設けた「ふりかえり」の時間には、自らの活動の良かった点、反省すべき点を報告し合うことで成果と課題を共有し、翌日の活動への手掛かりをつかむことができた。また、事後アンケートの自由記述欄によると、「ふりかえり」の時間の愛媛大学講師や交流の家スタッフからの助言も、大学生の不安解消や励みにつながった様子が記載されていた。

事業後のアンケート調査から、社会人基礎力の指標は、全ての項目において向上が見られた。

(図1) 特に「主体性」や「働きかける力」、「実行力」といった「前に踏み出す力」の向上が顕著であった。本事業でねらう力の指標も、事前、事後を比較すると全ての項目において数値が上昇しており、リーダーとしての自己肯定感につながったと考えられる。(図2)

参加者が記録した変化曲線からも、ふりかえりの時間には、自らの活動を冷静に見つめ直し、次への意欲化へとつなげて、日を追うごとに感情が高まって行く様子がうかがえた。(図3)

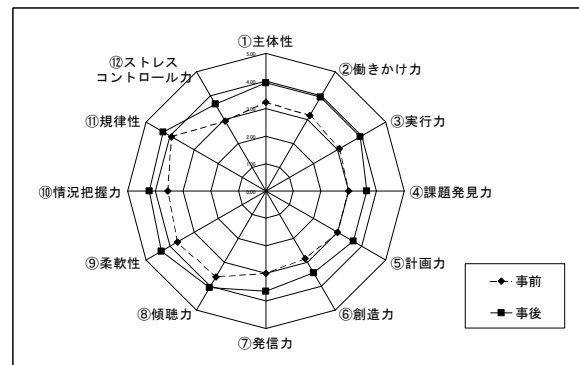


図1 社会人基礎力の変化

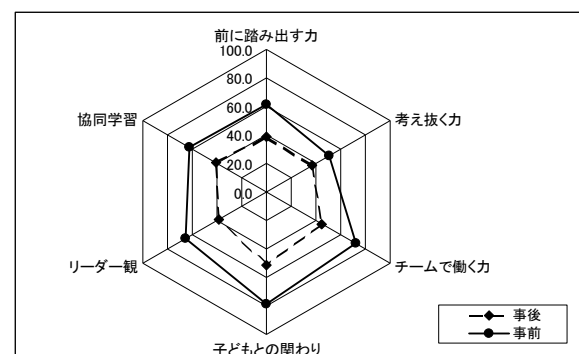


図2 事業でねらう力の変化

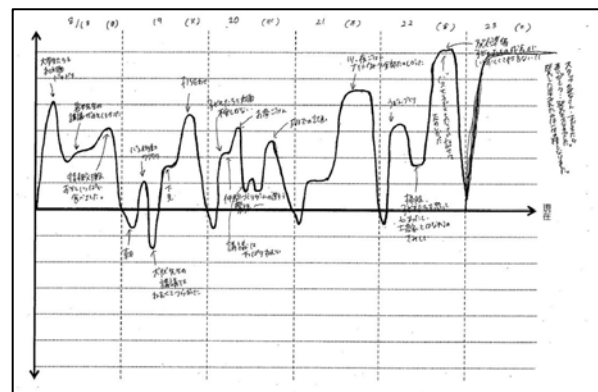


図3 変化曲線(代表例)

【成果2】多様な参加学生の活躍

今年度の参加大学生14名のうち、2名当事業が始まって以来初めての過年度(平成23・25年度)の参加者であった。また、高校時代に法人ボランティアとして当所で活動していた大学生も1名参加した。

過年度の参加者は、過年度の体験を振り返りながら、自らの活動をより深化させようという思いが見受けられた。特に4回生の学生は、大学生のリーダーとしての自覚を持ち、適度な立ち位置を考えながら、活動全体を上手くリードすることができていた。

法人ボランティア経験者である参加者は、施設や大学で学んだ子どもたちとの関わり方を十分に理解し、他の参加者の手本となる活動がなされていた。

過年度参加者や法人ボランティア経験者が参加者の中にいたことで、特に活動の序盤では参加学生たちの不安の軽減につながり、心理的な余裕を生み出すことができていた。

【成果3】I K R（生きる力）評定用紙（簡易版） 事前事後の比較

本事業での体験が、小学生にどのような変化をもたらせたのかを調査するために、「I K R（生きる力）評定用紙（簡易版）」を実施した。右のとおり、全ての項目において、事業前に比べ、事業後にその数値が向上した。本事業との関連性を明確にすることはできないが、小学生もこの事業をとおして成長し、自信をつけることができたと考える。（図4）

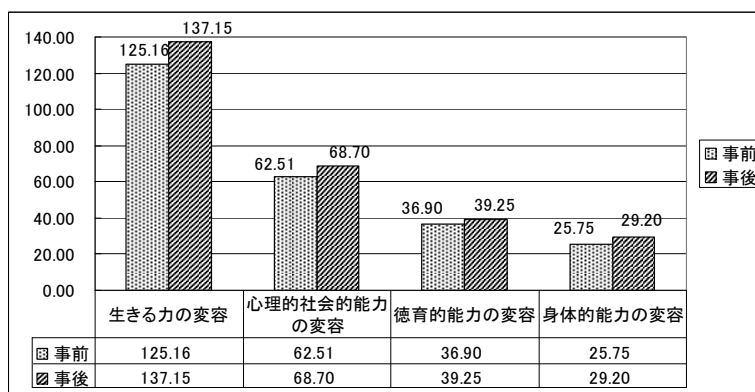


図4 I K R評価用紙（簡易版）調査結果

【課題1】ゆとりある日程にすること

昨年度の反省を生かし、土居家に移動後は極力活動場所の大幅な移動のないプログラムに修正した。そのため、惣川地区での活動は全体的に時間的なゆとりが生まれ、大学生も小学生も安全かつ元気に活動することができた。しいて挙げれば、20日の竹を用いたものづくりのプログラムで、活動内容を盛り込みすぎた感がある。21日のうちわづくりのプログラム中に、竹のものづくりの続きを行う予定ではあったが、もし当日が雨天となっていた場合には、満足な活動とはならなかったかもしれない。今年度の反省をいかして、時間設定や活動内容の選択に生かしていきたい。

【課題2】リーダーとしての活躍の場を保証すること

今年度の大学生の参加者の全員が、「法人ボランティア」に登録した。子どもたちとの関わりを実践的に学んだこれらの大学生たちを、「地域に根ざしたリーダー」として、今後も活躍の場を作っていくことが今後の課題である。特に、愛媛大学と連携し、当所や当所が関係する実行委員会等の、子どもと触れ合う事業に積極的に参画を促していきたい。

【課題3】小学生の事業前後の変容をより客観的に捉えること

「子どもむかし生活体験村」に参加した子どもたちに対して、本事業の前後にI K R評定用紙（簡易版）を用いて体験活動がもたらす変化を測定したが、調査結果の視点を変えてみることも検討したい。具体的には、保護者の視点から子どもたちの変容を捉えてみることを検討してみたい。

本事業は、平成19年度から継続して実施し、今年度で8回目となる。講師の方々の熱心なご指導や西予市野村町惣川地区の皆さんの協力、国立大学法人愛媛大学等関係機関との連携があって成り立っている。これらの方々に感謝しながら、その関係をさらに深め、より充実した事業を実施できるよう努力を重ねていきたい。